慶應義塾大学医学部開設100年記念

記念式典・シンポジウム・記念祝賀会開催

慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

5月13日（土）、慶應義塾大学医学部の開設100年を祝した記念行事が東京都千代田区のホテルニューオータニにて開催されました。この日行われた記念式典、記念祝賀会の会場には約1000名の来賓・招待者、塾生（在学生）、塾員（卒業生）、教職員等が一堂に会し、医学部開設100年を盛大に祝いました。医学部新聞5月号は医学部開設100年記念号として、当日の様子をお伝えします。

記念式典

医学部100年の伝統を受け継ぎ 未来医療の開拓を高らかに宣言

5月13日（土）、慶應義塾大学医学部開設100年記念式典が、記念シンポジウムに引き続き、ホテルニューオータニ・芙蓉の間において盛大に、そして厳かに挙行された。

ブルーとレッドに彩られた照明の中、正面には慶應三色旗が大きく掲げられ、慶應義塾ワグネル・ソサイエティー・オーケストラ、男声合唱団の演奏に迎えられ、700人超の参加者が、医学部開設100年目のそれぞれの思いを抱きながら席に着いた。司会、進行は、慶應義塾大学卒業生でもある宮本隆治さん、魚住りえさんが担当した。

式典は、岡野栄之医学部長の開式の辞により、開会となった。岡野医学部長により、慶應義塾大学医学部は、北里柴三郎博士を初代医学部長として100年前の1917年の4月に開設され、以来100年間「基礎・臨床一体型の医学・医療の実現」、「学内は融合して一家族の如く」の理念のもと、関東大震災そして東京大空襲など幾多の苦難を乗り越え、研鑽を積みつつ、多くの優秀な医師・医学者を輩出し、今日に至っていること、そして、医学部開設100年の記念事業の一貫として、多くの関係者の悲願であった新病院棟の建築が順調に進行中であり、2018年の3月下旬に竣工、5月7日に開院予定であることが紹介された。

続いて、清家篤慶應義塾長による式辞が述べられた。清家塾長は、100年記念式典に参加して下さっているご来賓の方々への御礼を述べられるとともに、基礎と臨床を両輪とするということを唱えられた北里柴三郎先生の100年前の思いが本日に至るまで様々な形で具現化されてきていること、そして、次の100年に向けて、患者さんを第一に考えるクラスター診療が新病院棟の中で実現されることの意義を強調された。さらに、慶應義塾大学医学部、慶應義塾大学病院が世界トップレベルの機関として今後さらに発展を遂げることへの期待を述べられた。

引き続いて、文部科学大臣　松野博一様（代読　戸谷一夫事務次官）、厚生労働大臣　塩崎恭久様、経済産業大臣　世耕弘成様（代読　江崎禎英商務情報政策局ヘルスケア産業課長）より、祝辞が述べられた。特に、塩崎恭久厚労大臣は、慶應義塾医学部の卒業生が日本の厚生行政に果たした役割は大きく、今後立ち向かわなければならない様々な問題を解決する上でその活躍が益々期待される旨、述べられた。

医学部は開設以来国際連携を推進してきていたが、数多くの国際連携協定校を代表して、ワシントン大学（セントルイス）前医学部長のLarry J. Shapiro教授より祝辞をいただいた。国際社会における慶應義塾大学医学部の貢献は実に幅広く、学部学生、大学院生、研修医、研究生、教員と様々なレベルで交流が行われている。特にワシントン大学の教員として4人の塾医学部卒業生が活躍しており、今後さらに同様の強固な連携を世界中の大学、研究施設とすることにより、慶應義塾の国際社会における発展が期待された。

日本学術振興会理事長であり、前慶應義塾長でもある安西祐一郎様による祝辞が続いた。日本学術振興会は、科学研究費助成事業をはじめとする助成事業において、現場のニーズに即したボトムアップ型の研究をサポートしている。また、前塾長時代に、「慶應義塾21世紀グランドデザイン」を掲げ、病院経営改革として大学病院経営ボードを組織するなど、医学部・病院における主体的な改革を支援した成果が本日に結びついていることが紹介された。

引き続き、ご来賓の方の中から、衆議院議員、甘利明様、河村建夫様、塩谷立様、竹下亘様、木村弥生様（代理　藤田清秘書）、参議院議員、武見敬三様、古川俊治様が紹介された。海外からのご来賓の方の中から、ソーク研究所Fred Gage教授、キングスカレッジロンドン医学部長Richard Trembath教授、北京大学医学部長詹启敏教授、ニューヨーク医科大学ロイ芦刈教授、米国NIH国立加齢研究所David Schlessinger博士、ペンシルバニア大John R. Stanley教授が紹介された。

そして、医学部学生を代表して、5年生の久野真弘君、6年生の濱田江里奈君により、未来に向けた宣言が行われた。

「私は治るのでしょうか？」ポリクリの実習の際にふと病棟で患者さんから問いかけられ、答えに窮した体験をもとに、1000年前から現在までの医療状況の変化、そして今後100年先に起こるであろう変化を学生の視点で捉え、「社中協力」という慶應義塾の特性を大切にし、未来医療を開拓して行こうとする未来宣言は、参列者の多くの感動を得た。次の100年を担う若者の存在、可能性があることで、私たちがどれだけ力づけられたことか、わからない。

式典の最後は、塾歌斉唱である。慶應義塾大学應援指導部、ワグネル・ソサイエティー・オーケストラ、男声合唱団の伴奏で、参加者一同声高らかに歌い、一体感を実感した。100年に一度しか来ない式典の余韻を感じながら、祝賀会会場への移動となった。

（天谷雅行　64回）

次世代を担う学生による「未来宣言」。
中央左が久野真弘君（医学部５年）、右が濱田江里奈君（医学部６年）

清家篤塾長

岡野栄之医学部長

ラリー・シャピロ
ワシントン大学前医学部長

安西裕一郎
日本学術振興会理事長・前塾長

全員で塾歌斉唱

塩崎恭久厚生労働大臣

シンポジウム

「慶應医学－次の100年に向けて」をテーマに 7名の医師・研究者が最先端研究について講演

100周年シンポジウムは、5月13日13時からホテルニューオータニで開催された。会場には、一貫校学生から現役医学部生、三四会会員の先生方、他大学、研究機関の先生方など1000名近くが集まった。

講演者は、国内外の著名な研究者3名（御子柴克彦博士：理化学研究所脳科学総合研究センターシニア・チームリーダー、Fred H. Gage博士：Adler Professor, Laboratory of Genetics, Salk Institute for Biological Studies、山中伸弥博士：京都大学iPS細胞研究所所長）と、慶應医学をリードする現役教授4名（北川雄光外科学教授、金井弥栄病理学教授、本田賢也微生物学・免疫学教授、広瀬信義百寿総合研究センター特別招聘教授）で、100年の節目に相応しいシンポジウムとなった。また、座長は歴代医学部長の猿田享男名誉教授、北島政樹名誉教授、池田康夫名誉教授、そして現役医学部長の岡野栄之教授が担当された。

冒頭の岡野医学部長の挨拶では、医学部創設初代教授の北里柴三郎先生が唱えられていた「基礎医学と臨床医学の連携を緊密にし、学内は融合して一家族の如く」の理念が強調され、これまで100年の歴史を築いてこられた諸先輩型への感謝の意と、これから100年に向けての「大学とは、学問をする所である。慶應義塾大学医学部にとって学問とは、「教育」「研究」「診療」の実践である」という新たな決意が述べられた。

講演者トップバッターの北川教授は、癌の治療方針が、できる限り大きく切除するという侵襲的な手術から、患者さんの負担を最小限に抑えるための低侵襲治療へと、この100年間で大きく変わったことを話された。それを可能としたのが、最新のロボット手術やイメージング技術であり、今後もさらなる技術開発の発展とともに低侵襲治療の方向性は続くだろう、そして100年後には今では想像もつかないような医療が実践されているであろう、という未来への期待を込めて話を終えられた。

金井教授からは、ゲノム医学やオミクス解析を導入した新しい病理学の提案、すなわち先制医療・個別化医療を拓くデータ駆動型研究の紹介がなされた。そして、それを可能とするのが、高い品質の試料を確保することであり、その実現に向けた試料収集・管理手順の標準化を推進されていることを話された。

本田教授からは、腸内細菌（マイクロバイオータ）研究の世界のトップランナーの一人として活躍されているが、最近制御性T細胞の分化と機能に影響を与える細菌株の分離培養に成功し、それらと抗体医薬を組み合わせることで、新しいがん治療法を開発しているというお話があった。

広瀬教授は、15年以上も前から全国規模で包括的百寿者調査を、次いで超百寿者調査（105歳以上の方）を続けられてこられ、その研究成果は世界でも注目を集めている。最近、110歳以上のスーパーセンテナリアンが増えており、彼らこそが真の健康長寿モデルだと話された。また、ゲノム医学やオミクス解析を用いた新しい長寿研究の展開が期待されていると締めくくられた。

御子柴博士は、「オリジナルな研究の重要性、感性を磨き、興味を持ったことをとことん追求し、得意なことで勝負するべき、流行は追うのではなく自らが創りだすべき」といった若手研究者への痛烈なメッセージからお話を始められた。ご自身のIP3受容体の発見のお話に加え、その後ひたすら研究を継続発展されてきたことで、IP3受容体関連シグナルの異常が様々な病態や疾患で確認されたことをお話された。

Gage博士は、ゲノム解析から見えてくることを進化の観点からお話された。トウモロコシでは全ゲノムの約80％、ヒトでもその半分近くを占めるレトロトランスポゾンはゲノムの多様性を生み出し、進化の過程で重要な役割を果たしてきた。その研究が進めば、未来の進化もある程度予測できるかもしれない、そんな期待が膨らんだ。

山中博士は、C型肝炎が原因で亡くなられたお父様の話から始められ、「今現在治らなくても将来それが可能になる。そして、サイエンスの力で医学・医療を変えていくのだ」という強いメッセージを伝えられた。ノーベル賞を受賞されたiPS細胞発見のお話と現在進められている再生医療の実現や疾患別創薬への展開のお話は、まさにご自身のメッセージを自らが先頭に立って実践されていることを証明するものだった。

シンポジウムは、最後に河上裕研究科委員長が挨拶され終了となった。創設以来の「基礎・臨床一体型」の質の高い医学研究、医療の実践を積み重ねてきた慶應医学の伝統を改めて確認するとともに、次の100年に向けた将来への決意を固めることができたのは決して私だけではないと思う。

（安井正人　68回）

山中伸弥博士
（京都大学）

Fred H. Gage博士
（Salk Institute for Biological Studies）

御子柴克彦博士
（理化学研究所）

金井弥栄病理学教授

北川雄光外科学教授

広瀬信義百寿総合研究センター特別招聘教授

本田賢也微生物学・免疫学教授

北里記念式の挙行について

本年は初代本学部長北里柴三郎先生の86年祭にあたり、医学部と三四会との共催によって下記により北里記念式を執り行うことになりました。三四会の皆様方のご列席の程をお願い申し上げます。

記

日時　6月12日（月）午後1時
会場　北里講堂

医学部長　岡野　栄之
三四会長　武田　純三

平成29年度三四会評議員会開催のお知らせ

会則20条に則り、次のように開催します。

記

日時：平成29年6月17日（金）
　　午後3時～5時
場所：2号館11階　大会議室

本評議員会は総会に代わるもので、（会則18条）、本会の最高意思決定機関です。
評議員各位のご出席をお願いいたします。
なお、閉会後、情報交換会を開催します。

三四会長　武田　純三

鑑賞知来

平成29年3月23日慶應義塾大学卒業式の日に卒業25年塾員招待会があった。卒業式に列席し卒業生の門出を祝福した。卒業式に引き続き行われた2017年三田会結成式であらたな塾員を迎え入れた。その後の塾員招待会で同期の一人が教えてくれた言葉が印象的であった。「慶應義塾に入口はあっても出口はない。」比企連合三田会会長のお言葉である。この日卒業生は塾生としての生活を終えたが、あらたに塾員となり、義塾社中の一員として生涯変わることはない。まさに比企会長の言われるとおりである。

その三田会についてしばしば書物や雑誌の特集に取り上げられる。三田会の固い結束力が注目される。秘密結社、日本を動かす謎の巨大組織、インナーサークル、等、様々なキーワードが誌面に踊り、財界、政界に広がる人脈が取り上げられる。しかし現世利益の面ばかりが強調されているように思われる。三田会には年度三田会の他、地域三田会、勤務先職種別三田会などもある。これらを通じた塾員相互の助け合い、ビジネスにおける御利益は、確かに結束力を高める一因であろう。

三田会結束力の源は社中協力の精神である。そして結束力を高める様々な仕掛けがある。卒後10年毎に回ってくる連合三田会大会運営の当番と卒業25年記念事業がそれである。塾や同期と疎遠にならないように塾にかかわるイベントが絶妙に設けられている。愛校心を醸成し、塾と塾生を支える力となる。こうした活動を通じてあらたに知り合い、仲間となる者もいる。私も25年記念事業を通じて塾生の時には知らなかった友人を得た。

卒業50年にも塾員招待会があり、大学入学式に招待される。塾員が塾にかかわる仕掛けのクライマックスである。「出口のない」慶應義塾社中の一員として是非とも卒業50年塾員招待会にも出席し、入学式で新しい塾生を慶應義塾の「入口」に迎え入れたい。

（さぎぬま脳神経クリニック院長　島崎賢仁　71回）